

熊楠と奈良吉

「なら」民俗通信 □263

西村 博美

▼熊楠書簡

南方熊楠(みなかたなくまぐす)から森口奈良吉にあてられた書簡は、いまのところ三通あることが分かっている。いずれも大正十四年の日付があり、当時森口は、春日神社(欄豆(か)の職にあつた。内容は、

▼「春日神社小志」

大正十年、奈良女子高等師範学校の教員から神社に転じた森口奈良吉には、『春日大社大鑑』をはじめ、参拝者の便に供するための『春日神社小志』(大正十二年初版)他多くの編著がある。上記書簡①について

は、『小志』には「天然記

また書簡冒頭に、奈良吉が既に送った「参拝之契(しおり)」「小志」等の受領の札が記されており、続けて「絵葉書はあまねく拝見致させ、また近郊の住人等にも相示候上、当年十五歳に相成候娘に与え末永く保存致させ」とあるところなどは、稀代(きだい)の奇人といわれた熊楠のま

好ましい印象を受ける。

②の「川苔」のことは、

書簡③の始めに「明答下され」とあるから、問題

熊楠から来信のあった大正十四年のちょうどこのころ、鹿による農作物被害の抗議が神社にあり、奈良吉がその数頭を他の神社に譲渡したというのである。春日に祀(まつ)られる武甕槌命(たけみかづち)は、鹿島(か)の地から白鹿に乗って影向(ようこう)したという伝承がある。

「春日四所明神の神鹿として此の神の御苑の春日野に、飼育まれてある」と『小志』に記す当

の奈良吉が、裁判所にまで召喚され、新聞等でもたたかれていた。このころの熊楠もまた、大きな

「冬の木枯が吹き渡り、やがて霜枯時になると、青草は枯れて春日野の辺りは一体に枯野となり果てる。けれども郊外は麦が青々してゐる。これで、しばしば難問題を惹起(じやくき)してゐる。(じやくき)してゐる。けれども鹿から見たら作物も我領地の草木と差別はないはず。それは親しみから来た過失に外ならぬ。訴へたり、答(こた)がめ立てをしたりすべき條のものではあるまい」。

おそろしくこの言い訳めいた苦しい弁を記したのも奈良吉であらう。また当時春日野一帯には約九百頭の鹿がいたとある(『小

難問受けて 答えに苦悶

念物)竹柏樹林 神社境内御蓋山の西側を中心とせる九町四段五畝歩(略)。此木は我国の特産で熱帯林より暖帯林の中部に生じ松柏科であり云々(うんぬん)とあるが、そのあたりは植物学に精通した熊楠には既に周知のことであらう。

は「鹿」(③)についてあらう。

苦難のなかにあつた。同年三月、長男熊弥が高等学校の受験のために高知に行き、その地で発病している。奈良吉あて書簡にも「只今家内に重病人有之、日夜介抱に疲労はなはだしく」とある。さて、その鹿について奈良吉は他にも多くのところで触れているが、そこには熊楠の問いへの答えのようなものを見つけないとほろろと前掲の『小志』には「奈良吉は平素から鹿の食物は豊富といへないで断つて、次のように記されている。

志」(第三版、昭和四年)▼命名のトートテム

ところで、南方熊楠といふやや風変わりな名前が、熊野の藤白王子社に由縁を持つ。熊楠の兄妹九人もまた、いずれも「楠」を名の一部に持つが、なかでも自身は、熊と楠の二字を熊神より授かったといふことから、幼年期から神聖な樹木から受ける「口」に言つべからざる特殊な感じを抱いたといふ。

前記の書簡のやりとりの後、二人の間にはこんな交流があつたのかは不明だが、楠(く)といういわば命名のトートテム(トテム)なりに、熊楠は奈良吉にある親近感のようなものをおぼえていたのかも知れない。(詩人・奈良民俗文化研究所研究員)

熊楠は、人類学というトートテムを「ある天然物と自家との間の不思議な縁故連絡を意味し、その物がその人を守護する関係にあるところから「族霊」との訳を与えている(「南紀特有の人名」/「トートテムと命名」)。

このような熊楠のトートテム理解に触れて、中沢新一は「(熊楠は)自分が人間であると同時に、熊でもあり、楠でもあり、自然でもあることに、言い知れぬ喜びを感じている」と述べている(『動と不動のコスモロジー』河出文庫)。

また、熊楠はこんなふうにも言う。「奈良吉を人名につけたのは奈良県人に多い由。楠(ナラ)を名とするは楠と同じく、これを神とし、神木とし、産児の加護を仰いでのこと判(わか)る」。

南方 熊楠(1867-1941) 生物学・民俗学者

熊楠は、人類学というトートテムを「ある天然物と自家との間の不思議な縁故連絡を意味し、その物がその人を守護する関係にあるところから「族霊」との訳を与えている(「南紀特有の人名」/「トートテムと命名」)。

森口 奈良吉(1875-1968) 地理・歴史学者、春日大社権宮司、吉田神社宮司

「貴殿は年来鹿を親しく御覧のことなるが(略)かかることはあるものには候や」と問うものもの(十月三十一日)



森口奈良吉(昭和35年、85歳) = 『まほろば』14号より

「冬の木枯が吹き渡り、やがて霜枯時になると、青草は枯れて春日野の辺りは一体に枯野となり果てる。けれども郊外は麦が青々してゐる。これで、しばしば難問題を惹起(じやくき)してゐる。(じやくき)してゐる。けれども鹿から見たら作物も我領地の草木と差別はないはず。それは親しみから来た過失に外ならぬ。訴へたり、答(こた)がめ立てをしたりすべき條のものではあるまい」。

おそろしくこの言い訳めいた苦しい弁を記したのも奈良吉であらう。また当時春日野一帯には約九百頭の鹿がいたとある(『小

熊楠は、人類学というトートテムを「ある天然物と自家との間の不思議な縁故連絡を意味し、その物がその人を守護する関係にあるところから「族霊」との訳を与えている(「南紀特有の人名」/「トートテムと命名」)。